

ジャン・マルク・ガスパル・イタル伝

子どもの精神療法の開拓者

翻訳 川口幸宏

第1部 謎に包まれた少年期

1.

ジャン・マルク・ガスパル・イタル。彼が没して1世紀半以上経っているが、そのライフ・ヒストリーは定説を持って語られている。その基底にあるのは二つの評伝である。一つは、友人ブスケがイタルの死の6か月後、1839年12月1日、医学アカデミーで行った賞賛演説である。この演説は、数年後シミョー『伝記事典』に、ジョルダンの署名入り論文の中ではそのまま引用されている。あと一つは、1845年、『聾啞と盲の教育雑誌』においてエドゥアール・モレが書いている略伝である。ブスケはイタルと親しく交わっていた仲であり、モレは、イタルの職場であったパリ国立聾啞学校に1824年に復習教師として着任していた。職種こそ違え、モレとイタルは同僚であったのである。この二人によるイタル評伝は、近年まで強く影響を与え続けてきている。それらが描くイタル像はかぐわしい香りを漂わせている。曰く、子どもの精神医学の聖人、また曰く、聴覚に関する医学の聖者。さらには、知的障害教育の開拓者という輝かしい光を放っている。

にもかかわらず、彼の少年期はほとんど知られていない。医学アカデミーは、彼の生涯について情報を可能な限り収集しようと努力したが少年期についてはほとんど不明なままである、とイタルの墓碑銘に刻んでいる。幼い時両親の庇護の手から捨てられ放浪生活を送ったひとりの少年の療育で一躍ヨーロッパ中に名を轟かせたばかりではなく、聴覚に関する医学博士としても数々の業績を挙げた彼の少年期は、暗闇のヴェールに包まれている。医学アカデミーは史資料を求めて明らかにしようとしたが、何よりも、イタル自身が語っていないのである。歴史に名を刻んだほとんどの人たちは自らがその出生と生育を誇らしげに語っている、多くの場合、幾分と、いや、かなりの虚飾のヴェールを被りながら。そうした人々とは違って、イタルは謙虚さに自らを覆ったのだろうか。それとも、彼の少年期には、我々が目を覆い、口を閉ざしてしまうほどの隠しておくべき事実があるのだろうか。あるいは、イタルの心に癒しがたいほどの傷を作るほどの悲しみが襲ったのだろうか。

イタルは正規の医学教育も受けておらず、ましてや精神医学に関する知見も十分に得

ていないにもかかわらず、一人の未開の少年の精神療法に取り組んだ。そのモチベーション、そのエネルギーの源は何であるのか。それらを明らかにするために、我々は、彼の秘密のヴェールを取り除くことにしたい。イタールがアヴェロンの少年に対して行ったように、どのような些細なことをも見逃すことなく、細心の注意を払って。

2.

ジャン・マルク・ガスパル・イタールはプロヴァンス地方バス＝アルプ県オレゾンで、1774年4月24日に生まれた。しばらく、彼の家族関係について触れよう。

イタール家はオレゾンで聖体拝領をした。父はジョセフ・バングラス・イタール、1751年10月26日生まれ、母はアンヌ・ブレッサン、1751年10月26日生まれ。1766年5月22日に、二人は結婚した。

父母は前の代からの仲買人を引き継いでおり、若くして財産があった。とりわけオリーブや穀物が買い付けられ、オイルや小麦粉にして転売された。その他にアーモンド、羊毛、ラベンダーも買い付けられている。羊毛は糸に加工され転売されたが、それはイタール家の財産をさらに豊かにした。

家族関係は少し込み入っている。姻戚関係上では、イタールは、その両親とはきょうだい、すなわち父は兄、母は姉、となっている。母アンヌ・ブレッサンは、ジャンヌ・バプティストとジャン・ブレッサンの間に生まれた娘であった。父ジョセフ・パンクラスは、ジョセフ・イタールとマルグリット・イタールの間に生まれた息子である。ジャン・バプティストは配偶者ジャン・ブレッサンを失い、ジョセフ・イタールは配偶者マルグリット・イタールを失った。二人は、我々が主人公ジャン・マルク・ガスパル・イタールが誕生する丁度4年前1770年4月24日に結婚する。この二人の間で、1772年2月22日にアンヌ・イタールが生まれた。ジャン・マルク・ガスパル・イタールの母アンヌ・ブレッサンは、アンヌ・イタールとは同母異父の姉にあたり、父ジョセフ・バングラス・イタールは、アンヌ・イタールとは同父異母の兄にあたることになる。この風変わりな姻戚関係がジャン・マルク・ガスパル・イタールの精神にどのような影響を与えたかは不明である。彼の兄弟姉妹は4人いる。彼が生まれる前に生没した者はマルグリット(1766年11月3日生まれ、1769年1月13日没)、ジョセフ(1771年3月17日生まれ、1773年8月20日没)、彼より後に生まれ先に没した者はフランソア・クレール(1777年1月2日生まれ、1780年6月6日没)、エスプリ・ジョセフ(1779年5月20日生まれ、1780年7月11日)。それぞれが非常に短命であることが分かる。イタール家で生き延びたのは我々が主人公ただ一人

だけであったわけであるから、祖父母にとっても両親にとっても、至宝の存在であった。また、二人の弟は、彼が6歳の時に、相次いで死んでいる。幼心に、それぞれの誕生を心から喜び、そしてそれぞれの死による喪失感は大きなものであった。終生、彼の心の奥深くに刻み込まれた。

伝統・習慣に従い、イタールは誕生の翌日に、オレゾンの教会で洗礼を受ける。代母は父の姉マルグリット、代父はその夫がスパル・ジベールである。成人（20歳）にあたっては父方のおじジャン＝フランソアに祝福を受け、ジャンのファースト・ネームが与えられた。

3.

イタールが生まれてほどなく、一家は、オレゾンから15キロほど離れたところのリエに移り住む。県の司教区であった。3,000人ほどが住むこの街でイタールは子ども時代を過ごした。そして、時々オレゾンに滞在した。

子どもたちが生まれてはすぐに死んでしまうイタール家にとって、ジャン・マルク・ガスパル・イタールは家族の全ての期待が一身にかけられた。大事にされながら、監視されるという子ども時代。その一方で、両親は、幼い彼に、生まれて間もない弟たちの死の怖れについて、毎日繰り返し語る。そして事実としての喪失。いずれも両親のイタールに対する愛の表現であったが、それに対してイタールは寡黙であった。彼を開放的にしたのはオレゾンに降り注ぐ夏の太陽であった。ジャン・フランソアおじさんと一緒に、放牧地の羊の通り道あたりで羊を交配させる、ガナゴビーの修道院に登るためにサン＝トラシン川の浅瀬を渡る。これらはイタールの少年期の心地よき思い出である。知りたいと思い、どんなことでも、つまらないことでも、おじさんに尋ねる。イタールは知って驚き分かって喜ぶ。ジャン・フランソアはそういうイタール少年に、啞然とさせられるほどに、素朴だけれども深い知性が宿っているのを見て取った。

7歳になったイタールは、リエの中等神学校に入学した。県でただ一つのコレージュであり、街全体を見渡すサン＝マクシムの丘に設置されていた。イタールは、家族の内でも存命する男の最後の子どもであったから、将来に対しては、身を立て、名と共に財産を残す、という単純な義務の道が引かれていた。中等神学校への進学はおじのジャン・フランソアの勧めであった。イタール家は信心深かったけれども宗教者はただ一人だけいた。ジャン・フランソアがその人である。彼は大聖堂の副助祭を務めていた。数年後には司教を命じられている。

リエのコレージュでは、とりわけ現代フランス語を学びはじめる。もちろん母語であるイタリア語は言うに及ばない。また、英語も学習し、神学講座を熱心に求めた。その際、おじジャン・フランソアは学習の援助の手を差しのべている。コレージュには1789年まで在籍している。それ以降は父の仕事の手伝いをした。しかし父は、彼に仲買人という仕事を幅広く営む素養の育成とさまざまなことに慣れさせるために、1791年の暮れ、彼をマルセイユの比較的大きな銀行に身を預けた。1789年にパリで勃発したフランス革命は南フランスの大都市マルセイユにも大きな波が押し寄せてきた。そのため彼はすぐに生まれ故郷に戻っている。イタールがマルセイユに行った時には、英語を完全にマスターしていたという。

4.

ところで、ジャン・フランソア・イタールとは何者だろうか。彼の人生行程を追いかけていくと、そこにジャン・マルク・ガスパル・イタールの姿が微かにだが見えるのである。ジャン・フランソアの甥すなわち我々が主人公に彼は良い助言者であったのだろうか？人間のモデルとして意味があったのだろうか？二人はまるで兄弟のように似た顔付きである。しばらくは、ストーリーの主人公をジャン・フランソア・イタールに置いて語っていこう。

記録上、イタール家の前にジャン・フランソアが現れるのは、1775年8月19日のことであった。イタール家の公証人コルダンがその記録を書き残している。ジャン・フランソアの父は彼に2,000リーブルに相当する土地資産を遺産として分け与えた。オレゾン管区の葡萄畑であったが、ジャン・フランソアが言うところでは、聖職者身分に捧げられるものであるということ、つまりは司教の身分を手に入れる手段であった。彼の大大おじでリエのカトリック教会の司教フランソア・モレノンが、セドのノートル・ダムウの称号で長年蓄えてきた教会録を、ジャン・フランソアに譲渡するために、その葡萄畑が手段とされた。遺産相続後1か月も要していない。教会録の受領は1776年3月17日のことである。受領儀式を終えれば彼は助祭司から司教の身分となる。司教にはバチカンから年金が支払われるようになる。日々の生活には事欠かなくなる次第である。少々煩わしい挿話であるが、教会録の受領式は、我々はなかなか目にすることがないので、ジャン・フランソアに即して簡潔に綴っておこう。「オレゾンの副助祭ジャン・フランソアは教会録の言葉を恭しく述べ、それから試験を受けた。単旋律聖歌の適性能力が教会参事会によって認められた。その後彼は、助祭長の前でひざまずき、信仰告白をし、ジャンゼニウスの5つの戒律を大声で非難し、教会参事会の慣例の遵守を誓った。そしてレは司教への服従を約束した」。

1777年1月18日に、教会参事会員の同僚の一人から、総額1,750リーブルで、ファブール・サン＝ロホの小さな館を買っている。それから約1年後、彼の老大おばマドレーヌ・モレノンがリエに所有していたその館を生前贈与される。館はうねうねと曲がりくねった中級道路のまっすぐなところにある。1779年3月7日、さらに、近くの通行権を買う。この館の菜園へと向けた灌漑用水路をこしらえるためである。24歳で、彼はすでに金持ちであり、大聖堂の教会参事会員という名誉ある地位を期待することができるほどであった。

しかし彼はリエを離れていた。1780年1月には彼の姿を王の軍隊の中に見出すことができる。つまりこの時点で彼は反革命の立場にあったわけである。しかし、彼は革命の進展に忠実な、いやさらに積極的な立場に身を転じている。この間の事情をかいま見たい。

1789年8月4日のパリ・コミューンによって聖職者が第3身分に合わされ、教会財産が没収され、1790年7月12日に聖職者世俗法が公布され、同年11月27日には司教が公職宣誓の義務が定められる。1791年の凍りつくような1月のはじめ、日曜の朝、大ミサの間に、全司教が説教壇で、信徒たちにむかって、国家への、法への、王へのそして新しい憲法への宣誓をなした。しかし聖職者の大半は宣誓することを拒む。非宣誓僧は立憲議会によって犯罪容疑者であることを宣告された。聖職者の破壊はフランスの非常に小さな小教区にまで表れ、恐怖政治に到る運命の紛糾の端緒となる。1792年5月の終わりに、立憲議会は、非宣誓僧は単純密告でフランスから追放されると、布告する。8月26日、わずか8日間で彼らは祖国を追われることになる。その間に、8月10日、王政が廃止され、とりわけ世俗法への宣誓が無効とされる。それに替えて自由と平等とへの宣誓が求められるようになる。それから1ヶ月後、9月の大虐殺を見ることになる。

リエでは、**元司教**ジャン・フランソア・イタールが革命過程に身を投じていた。彼は、1790年12月6日、聖職者世俗法に宣誓する。しかし法はリエの司教区を廃止するものでもある。第1共和政第1年（1792年）11月23日、ジャン＝フランソアは、国家と法への忠誠、彼が保持する全権力の抑制、真の共和主義者として自由と平等、さらには生涯にわたって禁止されたポストには就かない旨の宣誓をする。同日、ディーニュ県会理事の役職に任ぜられる。直ちに郡書記となり、1793年5月1日には副郡長となる。

口先だけの誓いどころか、まさに正反対の、平明かつ明確な選択である。とりわけ彼は、ディーニュ郡のために、革命軍が必要とする志願兵の総動員を組織した。23人に1人の割合であった。リエは90人、オレゾンには15人の供給となる。ディーニュ県会の1793年3月6日の臨時議会で軍事行動が開始決定される。臨時議会は次のような記念すべき言葉で開かれている。「栄光は我が戦士の前にある、勝利の叫びが到るところでそれを告げている。

すでに、戦士たちの戦列に抵抗した暴君たちは打ち負かされた。栄光は摘むばかりだ。栄光を共にするか、それとも暖炉でおとなしくしているか」？

彼は単に男たちを集めるだけではなく、装備を調える。ジャン＝フランソアは経理部を担っていたのである。彼はエクスおよびマルセイユに赴いた。大量の布地などを買い付ける任務を担った。200人の軍服すなわちジャケットとキュロット、300個の革袋、400人の志願兵に必要なブラシと櫛、靴下300足、600の襟と300の襟止め、600対のゲートルに必要な大量の黒または灰色の生地、とりわけ400丁の銃。4月15日に出発し5月末まで帰っていない。その際彼は、19歳の甥ジャン・マルク・ガスパルを帯同している。徴兵を逃れる数少ないチャンスだったのだろうか？彼はツーロンに寄り道をし、甥をリエの同郷の人で友人ヴァンセン・タルノウに託す。ソリエスに開設されているイタリア軍の陸軍病院を管理している人である。かくしてジャン・マルク・ガスパルは、共和国の戦場で無名の死の栄冠を戴かされるかもしれない不可避の徴兵から免れることになる。

任務を遂行し、おじはディーニュに戻った。

ジャン・フランソアは同年11月はじめに再びリスに戻る。1793年11月16日、彼の兄が、彼のために、使用人に馬を御させた。17日、日暮れには、すでにオレゾンに後についている。夜10時、ヴァンサン・レノアールとアンドレ・ブランが、アス川の浅瀬に通じる大道に面したサン＝セバスチャン街でうろついている彼の馬を見つけた。乗る人も御する人も姿が見えない。馬は手綱、鞍そして旅行鞆をつけたままであった。2人は援軍を探しに走る。そして11時頃、ジャン・ガスパル・ガレイ、ジャン・ルイ・ブレ、ジャン・マルク・デュモン、ルイ・ラヴェその他の者を連れて、川の方向に行く。ヴァランソールに通じる道の下のアセ川の流れを遡って行き、まもなく、彼らはジャン・フランソアの死体を発見する。激しい波が砂利の岸に死体を打ち上げたようである。彼は紫の服、ジャケット、キュロット、黒の靴下、青と白の縞の長いズボンを身につけていた。蹴爪と銀の留め金のついた左の短靴しか履いていなかった。頭には綿の縁なし帽子。首を結ぶ黒のネクタイ。黒のキュロットの靴下止め用の銀の留め金。オレゾンの医師アンドレ・ジュリアンは、身体には、傷も打ち傷も打撲傷も見いだせず、首に少々出血があるのを認める。腹部はふくれあがり顔は蒼白で、水中にかなりの時間沈められていたと思われる。

彼は同日埋葬された。11月17日、ありふれた形式に従ってのことである。

誓約僧であり革命主義僧であるジャン＝フランソアは、こうして、不意に訪れた凄惨な死の秘密を凍てついた水の中に運んでいった。

39歳、生まれ故郷に向いて、姿を隠した。だが、少なくとも、彼はやっとの思いでその

甥を守ろうとしたのだろうか。

5.

港がイギリスに向けて開かれているツーロンに設置された陸軍病院で、若きジャン・マルク・ガスパルは外科医の助手に任ぜられた。彼は、そこで、おじフランソアの非業の死を知らされた。彼の子ども時代は終わりを告げた。

1794年の春の間、イル・ドゥ・ポール・クロの移動救急隊に配属されている。そこは、アブやネズミで溢れるツーロンの錨地で、非常に小さな三つの島。砂利の島々である。ツーロンに戻ってから、彼は、イタリア軍の外科医長ドミニク・ラレイの管理下に置かれる。コルシカ派遣の心配をくらすため——結果的にはそうならないのだが——、ラレイは解剖学や外科の公開講座を組織した。イタールとラレイの関係がどのようなものであるのかは分からない。しかし1796年のはじめに、ラレイがパリに戻る時に、若き生徒イタールを伴っていった。そのことによって、彼が将来つくべき職業——外科医——に入るのを容易にすることになる。

その前に、ジャン・マルク・ガスパルは、1795年の夏を友人ガスパル・ルーラン・バイユと一緒にオレゾンで過ごしていた。そして2人がうち揃って羊の黒死病の観察報告を集めている。それから、彼らは軍隊生活の道に戻った。そして首都へ、医学研究へと向かうが、それはバイユの友情が決意させたものであった。20歳をとっくに超えていた。並の背丈の若者、頑強で立派な体つきの若者。その表情豊かで生き生きとした顔立ちは、非常に感受性の強い苦悩をも併せ持ち、類い希な豊かな表情を見せている。アンリ IV世と瓜二つである。

彼の知識や実践の素養はツーロンで認められていた。そして恵まれたことに、パリの陸軍病院の教授たちが外科研究に専心するよう彼に言ったのである。そしてその人事配置で、1798年5月8日（革命暦6年花月21日）、ヴァル・ド・グラスの第3階級の外科医の職に就く。県会プロヴァンス地方のメンバーであるバラスの推薦状が添えられていた。

第2部 子どもの精神医学の開拓者

1.

第3階級の外科医？ただ単なる執事を指して言うための非常に大げさな肩書きである。手術室の管理人、手術助手、場合によっては死体解剖のための解剖学の解剖実習の助手。

ほどほどの給料、軍隊生活。貧困？もちろん。総裁政府のパリ、名高い首都では、不安や情熱とか喜びとか無しに過ごせるはずはない。あらゆる種類の光景、所有権返還要求にまで掲示された学士号、当時まだ完全には餌食を捉える顎を閉じていなかった検閲に向けられる大胆不敵な勇気。娯楽の庭園のパリ、アーケードの下でユスティニアスとそのエロチックな絵画が目の前で複製され売られるところパレ＝ロワイアル。それに、サン＝ラザール通りのチヴォリーも、マルブーフ、グランド・ショミエル、ジャン＝ゼリーゼも。1797年7月のある夜、一人の婦人が、薄物の透きとおった布地でできた鞆型のドレスを身にまとった婦人と、中心部を散策している光景と出会うことはないだろうか？これらの庭園や、昼夜問わず路上で供されるカフェーに見られる光景は、たいていの場合、どのような場面なのか見分けることが難しい。

パリには、600のダンス・ホール、劇場、夢中にさせる音楽劇—あばずれが泣きに行く—、1,000のコンサートがある。もちろん、ベンガル花火が渦を巻いて鳴り響くのは言うまでもない。逮捕や国外追放で、いつも、馬が早駆けをする。誰が裁判拔きの処刑を言い渡すのか？こうした騒々しさや脅しの言葉の最中に、おしゃれな伊達者たちを描いた戯画の手法で滑稽でかつ秀逸の『カルプ・ディーム』紙が、激しく泣き叫び、絶望的な様子を見せている1人の若者を、パリに貼りだした。

オレゾンからそしてリエの大聖堂から遠く離れている。もはや鐘は、勇敢で陽気な小さなプロヴァンス人のためには長く鳴り響かない。

イタールは1797年に医学校に学籍登録をする。そこで、彼は、生涯の友と出会うことになる。その友人は、おそらく、フリーメーソン団に関わっていた。ジャン・エティアヌ・ドミニク・エスキロール。ヴァル・ド・グラスでの仕事に加えて、彼は、ささやかな楽しみのために、ちょっとした仕事を試みる。博愛協会の第3、第4の無料診療所の補助医師となる。それは、王制復古の少し後に母親のための慈善協会となるのだが。

経済問題は、とりあえず、何とかなった。しかし住居の問題が残っている。パリの陸軍病院の兵舎の部屋は、隠れ家、つまり私的とも快適とも言えるようなものではない。1800年12月、彼はようやく聾啞学校の医師のポストに任命された。ポストは新しく創設されたもので、彼は正式の医師としての第1号である。その給料はほどほどである。月25フラン（パリでは、食肉500グラムが40サンチーム、パン1キロが45サンチーム、ブドウ酒1リットルが1フラン、薪1ステールが10フランで売られていた）。その25フランをもって、イタールは、庭園管理人トローニョン、門番セルヴァと苦難を共にする。サン＝ジャック通りであった。シカール師は年に3,000フランを受け取っていたから、月当たり

ほぼ 10 倍である。その代わり、とにかく利便さの点ですぐれており、ヴァル・ド・グラスの同僚たちは、陸軍病院を真正面に見ること、安値でよいアパートであることを、うらやむのである。

彼は病院で外科医とか薬剤師とかの多くの学生たちと親交を結ぶ。とくに、小さな仲間集団では、オネジム＝エドゥアール・セガンの父親がいる。彼はイタルの後輩である。しかしとりわけ親交を深くするのは、J. J. ヴィレイである。彼は、イタルがアヴェロン(le sauvage d'Aveyron)の未開人の治療を試みている数ヶ月の間、公然とイタルを励ます。聾啞学校に任命される数ヶ月前の 1800 年 8 月、アヴェロンの未開人の名で知られる子どもが到着する。シカールはほとんど暇でありかつ非常に用心深い人であるが、巧みに、若い医師にその子どもの教育を任せることになる。

シカールは医学研究を追い求めており、パリ医学校を裂いた論争の中で、コルヴィザールに対抗するピネル側についている。彼らはライバル意識から、医学協会や人間観察協会の会議の席で、しばしばぶつかっている。1797 年「哲学的病理学」の刊行以来、イタルは、まがいのない賛辞をピネルに捧げている。この書は、後の年々、若者の愛読書として格好の地位を占めるほどのもので、彼は、自身の精神を形成する力となるとさえ、告白している。ピネルのただ一冊の著作は、イタルの死後、その参考文献の中に、見出される。だから、2 人は知らない間柄でもなく、未開人をめぐって敵対する間柄でもない。

数週間のち、この教育がイタルをその主人と同じほどに有名にする。その評判は、1800 年 10 月、「精神異常に関する医学・心理学概論」の公刊で、頂点に達する。ヘーゲルが、まもなく、名だたるプロパガンディストの 1 人になる。イタルは、1800 年秋、子どもに関する彼の第 1 論文「1 人の未開人の教育について」の発売以降、その名声はその主人と同じとなる。直ちに同書は、イタルの手で、英語に翻訳される。ヨーロッパは熱狂する。同じくロシアの皇帝アレクサンドル I 世が、フリーメーソン地方支部のサファイアで飾られたピンを彼に送ることで、敬意と賞賛とを示すことになる。この宝石を身につけさせるだけでなく、大使は、サン＝ペトルスブルクの施設の提供を伝える。が、イタルはそれを拒否する。対照的に、彼と同時代人のヴァレンタン・ウーイが盲学校をそこに設立することを受諾する。

彼はこの教育を、興味分野を広げながら、4 年間遂行する。彼はアントニー・ウィリッチの「健康を維持し生命を伸ばすことに関する技術」(1802 年)の翻訳を進め、博士号の学位論文を準備する。論文は、1803 年 6 月 19 日(革命暦 11 年牧月 30 日)、公開審査を

受けることになる*。彼は、その時、ガスによる肺鬱血による 10 体の死体を解剖し、その機会に、気胸という言葉を作り上げる。彼が、この学位論文と未開の子どもに関する第 1 論文に、J. M. G. イタールではなく E. M. イタールと署名しているのはなぜなのだろう。同様に、英語翻訳版でも、ジャン・エティアヌヌ・マルク・ガスバル・イタールと署名されている。そして 1806 年の第 2 報告が E. M. イタールを繰り返している。<Étienne> の出現は、彼の友人ジャン・エティアヌヌ・ドミニク・エスキロルの指導に関する友情の証しを表明するものであるのだろうか？無自覚ながら二重の意味をこめて。<E. M.>はく エム (=愛する人) **A i m e** >と読ませることができる。<エム・イタール>と読ませるのは、揺るぎない信頼という個人的感情を表すものであり、奇っ怪な恋愛感情を抑えようとするものであり、同時に、未開の少年に共に関わろうと示唆するものであるのだろうか？

イタールは相も変わらずヴァル・ド・グラスに使用されている。1803 年 6 月 3 日 (革命暦 11 年牧月 14 日)、第 2 階級の外科医に昇進する。1804 年 12 月 16 日に彼が退役するのはどのような理由からだろうか？それより先の 12 月 1 日の布告を受けてのことか？分からない。約 1 ヶ月後の 1805 年 1 月 26 日、彼は外科医として副軍医の階級への昇進が提示される。あわせて、ルイ・マティウ・デプラーヌの後任として、ウトレヒトに駐留する連隊の第 11 連隊に配属されるとの提示が為されている。彼は数日間熟考し、2 月 8 日、陸軍大臣に宛てて、軍隊の辞職の手紙を認める。辞表によれば、軍隊勤務に従事することを許さないほどの日常的な健康障害がある、と理由付けをしている。

2. 放棄、財産と栄光

それで彼は、医師として町で開業をする。その評判は、未開人が彼にとって跳躍台の役に立ったというだけだが、パリっ子の世界に対して、それは一つの肩書きとなる。つまりそれはとても有利であることを意味する。ほどなく、彼は 1 人の重要な顧客を得、彼の患者のほど近くにパリの中央にアパートを借りる。毎朝そのアパートに行き、午後にはフォヴール・サン＝ジャックの聾啞学校のアパートに戻る。彼は、1791 年に最後の修道士たちが追い出されたオラトリオ会のこの旧神学校以外の場所で働くことはないだろう。聾啞者に関してはというと、彼らは 1794 年 4 月 1 日、セレスタン修道院に収容されていたヴァレンタン・ウーイの盲目の若者たちとの、1 日限りのはかなく空しい同居の後、そこに住むようになった。

* 【訳者覚え書き】オネジム＝エドゥアール・セガンの父親ジャック＝オネジム・セガンの博士論文の公開審査は 1805 年 4 月 26 日 (革命暦 13 年花月 7 日) である。

時を経て、イタルは広々としたアパートを手に入れる。そこは彼が整備し度はずれなまでに粉飾を凝らしたものである。実際は、彼は、2 軒のアパートを手に入れている。1 軒は 3 階で私生活専用であり、後 1 軒は 2 階で、接客用の数部屋で構成されている。

3 階には、キッチン。隣接して、家政婦用の部屋。ペンキを塗った木のベッドとクルミ材のテーブル、野生の桜材でできた肘掛け椅子を備えている。暖炉のそばには、2 つの銀色の松明と、壁には額縁入りの複製画。

この部屋は平常の食事を摂る小さな広間に通じている。編み藁張りの野生の桜の木でできた 4 脚の椅子で囲まれたブナ材のテーブル。イタルが時計師の仕事台を作り替えたマホガニー製の仕事机。万力を固定するためである。2 枚の白いキャラコ布の大きなカーテン張り巡らせた窓に面する音楽用譜面台。薄いねずみ色の板ガラスを詰め込んだマンテルピースの前には、暖房を供給する主管のついたストーヴ。壁には、より抜きの複製画が何枚か。イタリアの町とギリシャの遺跡。とりわけ、お気に入りか振り子のついた装飾時計 2 つ。最後に、寝室。庭に面している。寝室は全部、マホガニーである。大きなベッド、白大理石が張り詰められたナイト・テーブル。しかしそこは、眠れない夜のための仕事用でもある。事務机と緑色のモロッコ皮を張り巡らせた椅子。小さな書棚。書棚には非常に近い人から受贈した書籍コーナーがある。2 人用のソファと青緑色の布を張った大型の安楽椅子。窓と寝室に張り巡らせたカーテンとお揃いの色である。そして方々に、骨董品、宝石箱、彩色した磁器の花瓶、クリスタル。最後に、置き時計。

2 階では、イタルが、アパートの公共部分として、控えの間、図書室、食堂、サロンと閨房とをあつらえた。そこもまた、すべて、マホガニーである。

淡い灰色の図書室は地味である。そこには 2,000 冊の蔵書が 3 つに分類されて収められている。振り子時計が乗っかっているマンテルピースの両側に 1 つずつ、あと 1 つは庭に面している窓と窓の間にある。緑のモロッコ革で覆われた安楽椅子の側にはかぎ爪のついた事務机。長い方の壁に並べられた 6 つのゴンドラ椅子も。レモンを詰め込んだ高価な木材の小型の机の側は休息用。奥行きのあるソファと緑のビロードで張り巡らせたヴォルテール型肘掛け椅子もある。書棚のない壁には、2 つの風景画で囲まれた絵時計。そしてマホガニーの晴雨計。

本棚は多数の医学関係の書物で一杯である。病理学、生理学、解剖学、治療学。すべて同時代の著者から贈呈されたものばかり。ポルタル、マジエンディー、リシュラン、コルヴィザール、ピネル、ブドロック、フォデレ、ビシヤ、ジェオルジェ、デゾー、ブルッセ、テナール、カバニス、クータンソー。その他多数の雑誌のバックナンバー。医学事典、も

もちろん、未開人のボアシエールに関するヒポクラテスを含む、大古典文学の数々。

彼の門外漢の書籍類もまた目立つ。ルソーとベルナルダン・ド・サン＝ピエールがブスエ、フェヌロンおよびマシヨンとが隣り合わせになっている。コルネイユ、ラ・ブリュイエールとラシーヌがド・セヴィーネ夫人、モンテーニュおよびプルタルクとが隣り合わせだ。しかし同時に、ウオーター・スコットとスクリブは、書棚の大きな棚のいい場所、シャトウブリアンと聖書とが並んでいる。

閨房と大広間とは隣接している。窓にはモスリンがたっぷりとかかっている。その上には、いかにも重そうな白絹。小さな閨房には、とりねこの椅子 2 脚を備えたゲーム用机。空色の絹で覆われた小さなソファ。大広間には、2 人用の小型のソファと安楽椅子とにはブルーのシーツが掛けられている。壁には、額縁に入った複製画がいくつか。セレネが恋い慕うのに反していつも眠っているエンディミオン。アンティゴヌに導かれて、唾然としたオイディプス。幻の後のペドル、ヒポリットがもう戻ってこないのが悲しみで心を焼き尽くす。ベリセール、トラスの街道でパンを懇願する怯えた眼。オケアノウス、黒檀のようにきらびやかな身体 of 巨人、川と泉の冠をかぶっている。それと、泉の上に身をかがめる、光り輝く羊飼いのエト・イン・アルカディア・エゴ、そして掛け時計。

大広間から通路を歩いて食堂に行くことができる。食堂には亜鉛製の彩られた貯水器が 2 つある。食堂は簡素で、白キャラコのカーテンが掛けられている大きなテーブルはマホガニー。緑のモロッコ革を張った椅子。彩られた壁に付けた小さな机。

そのアパートに加えて、イタールは、聾啞学校の庭園の一部を独り占めしている。そこに彼は小さな丸木小屋をあつらえた。春から夏にかけての晴天の多い美しい季節には、毎日、そこで、読書をしたり、疲れを癒したりして、数時間を過ごす。そしてより抜きの友をもてなす。

生活はサン＝マグロアールでも快適である。住居を維持するために、彼は使用人を雇用する。そして、医師としての務めでは、極めて素早く、ヴァル・ド・グラスの 1 人の士官候補生の助けを得る。それは、彼がその候補生に治療措置の権限を委譲する、というわけである。同時に彼は、ヴァル・ド・グラスの学生たちが聾啞学校で住み込むよう、許可を得る。しかし何とかしてでも彼らに給料を支払わせようとはしない。象徴的なことである。まず、フッサールが 1815－1816 年に、時期尚早で行方不明。何人か後にブルジョウ。彼はシカール師の死の後 10 年間イタールを助ける。最後に、ルース。1832 年からイタールの死まで代理の仕事を引き受ける。イタールの最期の頃は完全に代行している。実際的にも肉体的にも治療能力を持ち得なくなるイタールは、個人的な病人患者たちも、彼に任せ

るのである。

3. 休みのない働き手

1804年に、イタールは彼のアパートに診療室を入れないという判断をし、首都の中央に診療室を開設することにする。午後になると聾啞学校に移動し、その図書室に籠もる。2階にあるそこで、1806年に提出する未開の子どもに関する内務大臣宛の報告書を作成する。2年以上に渡って治療を続けてきたものだ。この第2報告書は内密のものであり、学校の小さな学者仲間集団の中でも話すことはない。もちろん、おしゃべりなパリのいくつかのサロンでもそうである。この報告書は、学者仲間の大理石のテーブルにイタールの名を、非常に高い基準で公式に刻み込むことを、運命づけられる。同時に、放浪する、聾啞の、家族のことが分からない1人の子どもの様子から認められる、新しい現象すなわち人間の非常に重い障害について述べられることになる。学校の学者たちは、1806年に、この冒険の回顧話に拍手喝采を送り、イタールの熱意とともにその試みの正当性、すなわちその目的の科学的現実性、子どもの野生(*la sauvagerie*)に生じた哲学的、メタ心理学的問いを承認する。

イタールは、その困難な仕事をりっぱにやってのけたことを、大いに書く。まず、はっきりとしない思考が非常にゆっくりとしか解き放されない。思考がはっきりしてくると、それを表現する方法が第1の仕事と同じほどつらい第2の仕事の対象となる。彼は決して満足しない。彼の思考をより正確に引き出させる言い回しや表現が見つかるまで、文章を何度も何度も繰り返す、譲歩することなく、無視することなく。彼は荘厳な言葉で書く。それは医学というよりは文学的な言い回しである。彼が診療室にいない時には、書斎にいる。1802年に、彼はウィリッチの『家庭の衛生学』を翻訳する。未開人に関する第2報告書の出版(1806年)以降1822年に彼が医学アカデミーに入るまで、聾啞者に関する多数の報告書—約30本の論文—を書く。とくに『医学事典』のためである。1821年出版の主要著書『聴覚の疾患に関する治療』を準備する。丹念な観察者は一つのことに徹底的にこだわるようになり、1825年に、前もって適切に判断できる標として、確定的な臨床の標を描く。ド・ダンピエール侯爵夫人に見られるけいれん性のチック症の一覧表がそれである。この病気はギル・ド・ラ・ツーレットによって個別化されることになる。

イタールは王政復古期の注目の医者となる。大ブルジョアや貴族階級の最上の人認められるからだ。最期の時まで食事を供にする友人たちのおかげである。ド・クーテマンシュ侯爵がその人である。ルイ18世以降エジンバラ公の副官を務めた人で、続いてシ

シャルル 10 世の腹心である。彼は 1831 年に亡くなるが、その夫人と美しい兄弟ード・モン
トレズン伯爵ーがこのきずなを続ける中心となる。ジャッキノト・パンプリーヌ、エンピ、
ラマル。それと彼の生まれ故郷の代議員グラニエール。

バッセザルプとのきずなは密接なままである。彼はほとんどの夏、そこに滞在している。
友人ガスパル・ルーラン・バイユは何年か、そこに一緒に行っている。とくに 1815 年
には。死の前はほとんどそうした年はない。彼はこうしたどのような旅行も用件を片づける
のに利用している。小作人を更新する、家や地所を買う、売る、あるいは交換するための
契約。1808 年 8 月 9 日に父親が死んで以降、彼はオレゾンの不動産すべてを徐々に売り
払っている。それに反して、リエの家と庭園とぶどう園とは死ぬまで保持しつける。しか
し、永遠の友で、彼がバッセザルプでの用件の全体的なプロデューサーに指定したアポリ
ネール・マルティニが鐘楼で死んだ時は、その友が埋葬されることを好まなかったリエに、
すばらしい墓を買っている。

今のところでは、1801 年に未開人と共に喝采を得た名声を失っていない。そして彼を夢
中にさせている仕事は、どのようなものであれ、年々産み出されているし、感嘆もされ尊
敬も得ている。

1814 年、彼は、ピネルとエスキロールと同時に、レジョン・ドヌールを受ける。おそらく、
皇帝政体に対する政治的選択への報奨である。そして、ピネルと同じく、彼も 1822 年に、
医学アカデミーへの任命の筆頭召集団の一員となる。この時まで、彼は猛烈に執筆をする。
しかしその任命のはじめから、青年期に非常に深く刻み込まれた辛苦への緊張をゆるめる
という印象を与える。なるほど、難聴に関する何本かの論文と医学アカデミーに対するい
くつかの報告を書いてはいる。なるほど、医学の開拓的な様々なテーマに関心があり、そ
れに関してアカデミーに報告書ーミネラルウォーター、オメオパシー、秘薬、動物磁気
についてーを詳細に作成してはいる。なるほど、彼は友人エスキロールと、1827 年に出版さ
れたホフバウエルの『精神病患者と聾啞者共に適用できる医学』の訳註作業に参加しては
いる。しかし、情熱はへとへとであり、息切れしたようである。

街での医療実践は取りやめたけれども、毎朝、聾啞学校で患者を診る。その影響力は、
時に大きく、患者たちは一日中受付をし順番を待たねばならない。午後、一時の休憩をし、
『耳の病気の治療』の第 2 版の準備のために集めた資料の整理に取りかかり始める。

彼はすでに病気に罹っている。長い骨の痛みは決して収まらない。彼の性格が暗くなる。
彼の機嫌は突然のごとく荒々しくなる。彼の短い言葉はぶっきらぼうになり、性格は落ち
着きがなくなり、寡黙となる。彼は可能な限り外出し、3 階の小さな食堂で長く時を過ご

す。夜には、大切な振り子時計の機械仕掛けを取り外す。放置したままあるいはいじくり回した身体の中に閉じこもる復活祭の第1日曜日には、非常に感受性が強く非常にやさしい魂を隠す。彼が肉体的に苦しんでいること、それは明白である。その身体は年齢の割に曲がっている。おそらく強直性脊椎炎。その兆候は30歳前に現れた。

4. 病気

たしかに、すでに1805年2月は、彼は健康障害を呼び起こしている。1820年と1821年、ヴィシーにミネラルウォーターを買いに行く。1822年には、身体の様子がすぐれなくなる。それは体調のよい場合でも、やむなく憂鬱な時を過ごさせるほどのものである。1826年、彼がクータンソーとの交代を6ヶ月遅らせるのを余儀なくさせる。次第に、苦痛は押さえられなくなり、継続的になる。それで彼は、ひっきりなしに薬の投与を強く求めるようになる。1826年のはじめから、1年に何度も遅刻するのを避けられなくなる。ヴィシーで、病気の痛みの緩和のために、ミネラルウォーターを買い求める。それもむなしく、1832年7月17日、さらに病状が悪化し、やむを得ず、3ヶ月の休業をする。1837年7月、初めての例外的な休暇を願い出る。厳しい寒さで症状が悪化する恐れがあるから、と。6ヶ月間職務から離れることになる。1人の重篤の人が、パッシーへ、田舎の別荘まで、身体を引きずっていく。

1836年1月1日以来、リュウマチの痛みの中でたえず飲む鉄分を含み強壯用の鉱泉水を手に入れることができるようにと、彼は、コム・ブーヴェ氏から、ブーゼジュール庭園にある家具付きの小さな家を賃借する。家賃は、様々な経費、賃貸契約に含まれる約款、諸条件込みで、年間2,200フランである。最上級のパリジャンはこんな風な住まいを手に入れる。シャトウブリアンやロッシェニ風の住まい。同一平面に、寝室2、サロン1、食堂1、小部屋1そして台所1。隣接して厩舎と使用人が寝る小さな物置場。

正面の庭は色塗られた鉢植えの赤ザクロの木、バラ色の木犀草、白いオレンジで飾られている。奥の庭は、家の南にあたるが、イタルによってイギリス風に作り替えられた。あずまや、噴水、植え込み、洞穴、藁屋根のスイス風の小さな家。

ああ！なのに、彼にはこの庭のさまざまに整備したものを利用する時間はほとんど残されてない。1838年の春に、彼の健康はさらに損なわれる。5月28日、管理者は、彼が業務を離れてブーゼジュールに行くことを勧める。後に、安心して仕事から離れることができるという心持ちを彼に起こさせるために、友人たちがブーゼジュールへと、彼を説き伏せに行くことになる。出発の前、以前の出発の時と同じように、ルース博士を聾啞学校の

医務室に配属するよう、要請する。説明の補充が必要になった場合には、ウッソン博士を、とも。両人は近在に住んでいるからだ。使用人のアデルとジョセフに支えられて、見間違うほどに変わってしまったイタールは、家政婦のシャルビィが牛革製の旅行用の大型トランクを馬車の屋根に縛り付けている間、やっとのことで黒いベルリン馬車に乗り込む。真綿の青いシートに手を落とし、決して戻ってこないだろうことを自覚する。旅路は身体をさいなむでこぼこの十字架の道である。馬たちはそれを理解しない。激しい痛みを味わわなければならない。

だが、6月はすばらしい。庭のスイス風の小さな家で、彼は日中のすばらしい時間を休息用のベッドで過ごす。厚織りのリンネルがカバーしてある模造の竹のベッドである。籐椅子4脚、大きな肘掛け椅子1脚、折りたたみ式の小さな机1脚。この田舎風のサロンで彼はエドゥアール・セガンの訪問を受ける。アドリアン H. という小さな白痴の子どもへの教育のための最後の助言を彼に与える。そして、もはや使用することのない諸資料を彼に委ねる*。

まもなく、非常に親しい者だけが集められた。古くからの友人のリヴェー破棄院の判事一、エスキロールとウッソン一最期を知る人一、ドゥ・モントレズン伯爵とその女きょうだいのドゥ・クルトマンシュ侯爵夫人、シャルトン夫人一彼の友人の中でももっとも古く、もっとも大切な人一たちである。とりわけ、いとこのポーラン・シルベール。17歳、代母と代父の孫である。イタールはいとこのために医師への第一歩を導いている、早くその道を認めてやらなかったことを後悔している。彼はいとこに対し慎み深く深い愛情を持っているが、まさに彼にとっては得られなかった息子そのものである。ジャン・マルク・ガスパルは生涯独身であったが、再会した子どもの世話を受けながら眠り、おそらく最後に深い眠りに入るのだろう。

7月のはじめにはほとんど全身麻痺となり、ベッドから起きられなくなる。彼は協会の叙任司祭を呼ぶよう求める。そして、彼はパッシーのノートル＝ダム司祭による終油の秘蹟を心から受ける。7月4日の夜昏睡状態に陥り、翌日朝3時に死去。

彼の医学博士論文は、やっとならぬ35歳の時、その素材のために死体を10体解剖する必要があるが、遺言の特記事項で、彼は自身の死体解剖を禁止した。そして、科学上必要だと強調される解剖学的研究は病気治療の技術にはほとんど利用できないと説明し、苦しみ死んだ人間を、その存在の悲惨な条件の下にさらしてはならないのではないかと説得して

* Édouard Seguin, *Théorie et pratique de l'éducation des enfants arriérés et idiots*, 2^e trimestre, Paris, Baillière, 1848, p.86.

いる。

5. グラスのノートル＝ダムからモンパルナスの墓地へ

葬送の列がグラスのノートル＝ダムの前で止まるのは、翌日、7月6日金曜日、正午ちょうど、地獄の暑さの中である。教会は使者のためのミサで人で埋め尽くされる。やっと18歳になったばかりのポーラン・シルベールが喪主となる。その両脇には、老判事リヴェとルイズ・シャルロット・ド・クルトマンシュ。ルイズはシャルトン夫人を支えている。夫人は悲しみの涙がまぶたの下からこぼれている。その後ろに、ウッソンの先導になる医学アカデミーの要職にある代表団。アカデミー・メンバーの間には、エスキロール、パリゼ、ブスケの姿が見える。その後ろに、慈善施設の全職員、ドゥジェランドに先導されている。そして、同僚、友人、街の人々。

教会の側廊には、聾啞学校の全クラス、全員、女子生徒も男子生徒も。その思いのこもった姿は不安と悲しみを押さえきれない様子である。たとえ彼らに、逝きし者の善良さの証しは何なのかが分からないとしても。ウージェーヌ・アリベール。かつての教え子は復習教師となっている。1人の友人としてイタールを悼む。

教務の後、遺体はモンマルトルの墓地に運ばれる。霊柩車は、幹線道路の円形広場のちょうど前の大墓地の中に、ジャン・マルク・ガスパルを永遠の眠りにつかせようとする。聾啞学校長のオルディナール氏の近くで人の輪ができる。氏が感謝と別れの挨拶を述べる。その次に、医学アカデミーを代表してパリゼ博士が逝きし者の生涯を紹介し、善良さ、哀れみ深さ、そして慎ましさを偲ばせる。

続いて、一人ひとりが、柩が収められた墓穴の前に、ゆっくり、静かに、果てしなく進む、その行列。午後遅く、墓堀人たちはその仕事を終える。数日後、請負業者ヴォッシーが、ジャン・マルク・ガスパルが書き残しておいた略図をもとにした墓を完成させる。飾り気のない石で墓所を覆い隠すよう、故人は友人たちに指示してある。

碑文が彼の生涯を紹介する、2カ所の誤りから始まっている。

ここに眠る

J. M. G. イタール^氏。

1774年4月4日

リエ（バッセザルプ県）で生まれた

パリ学部の

医学博士
パリ市の王立聾啞学校の
医師
レジョン・ドヌール 5 等叙勲者
王立医学アカデミーの
メンバー
パッシー・コミュヌ
ブーゼジュールで死亡
享年 63 歳

Requiescat in pace (安らかに眠りたまえ)

その全生涯のような、雄弁であり目立たない象徴として、この墓碑銘に、もやい綱の先の船の錨が刻まれることが必要である。

